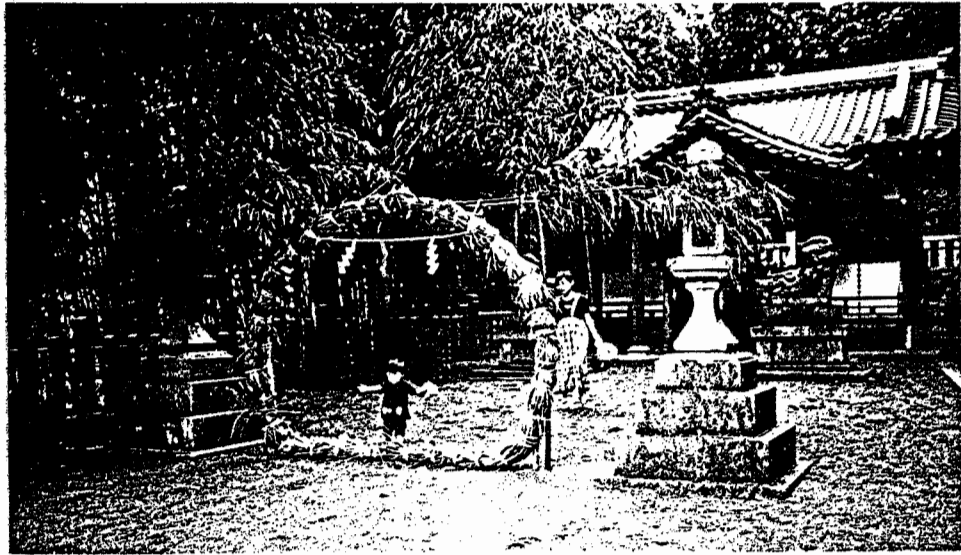
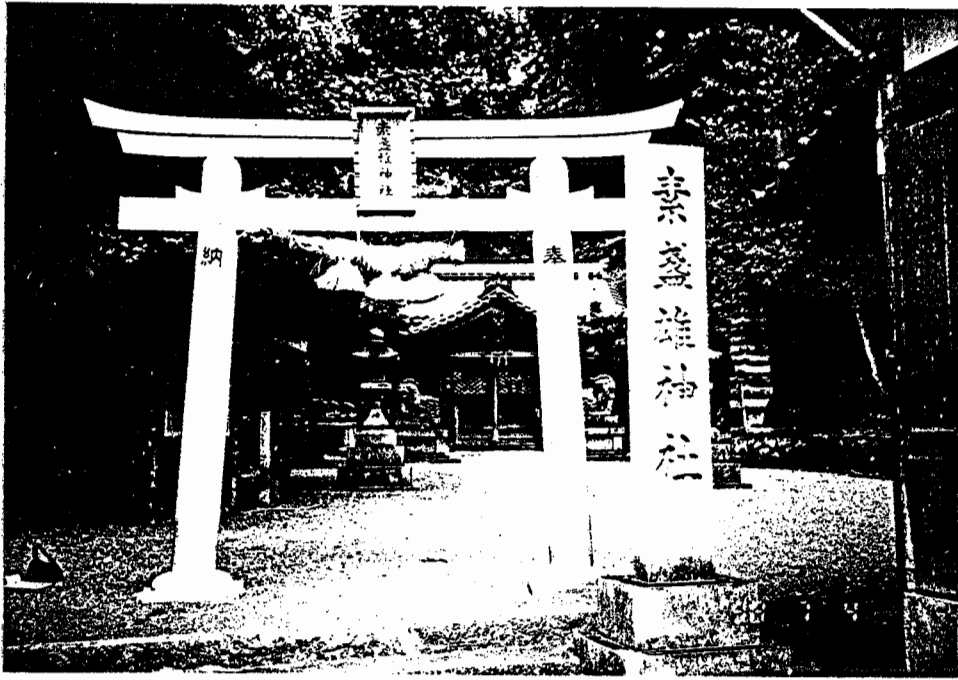
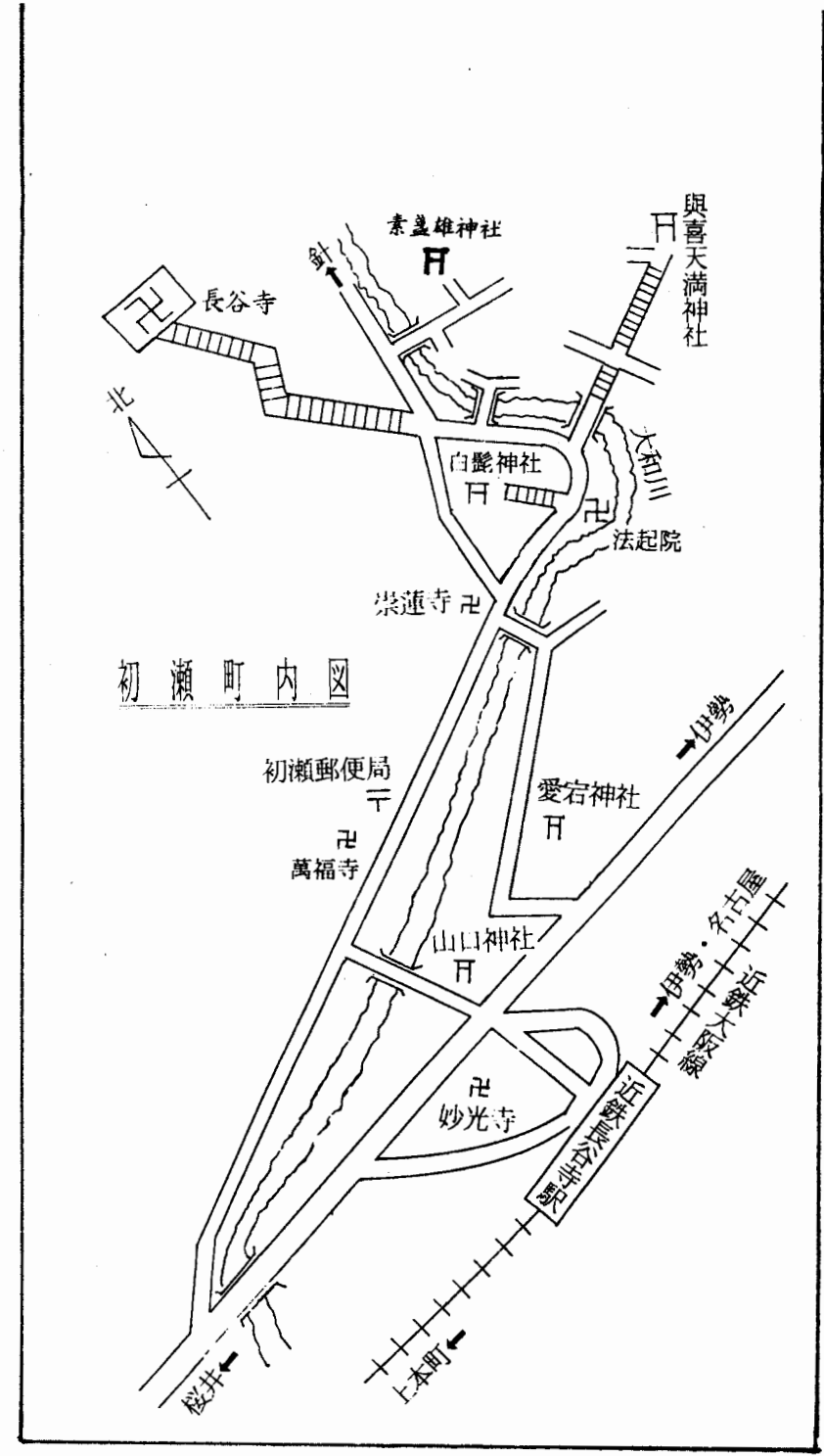
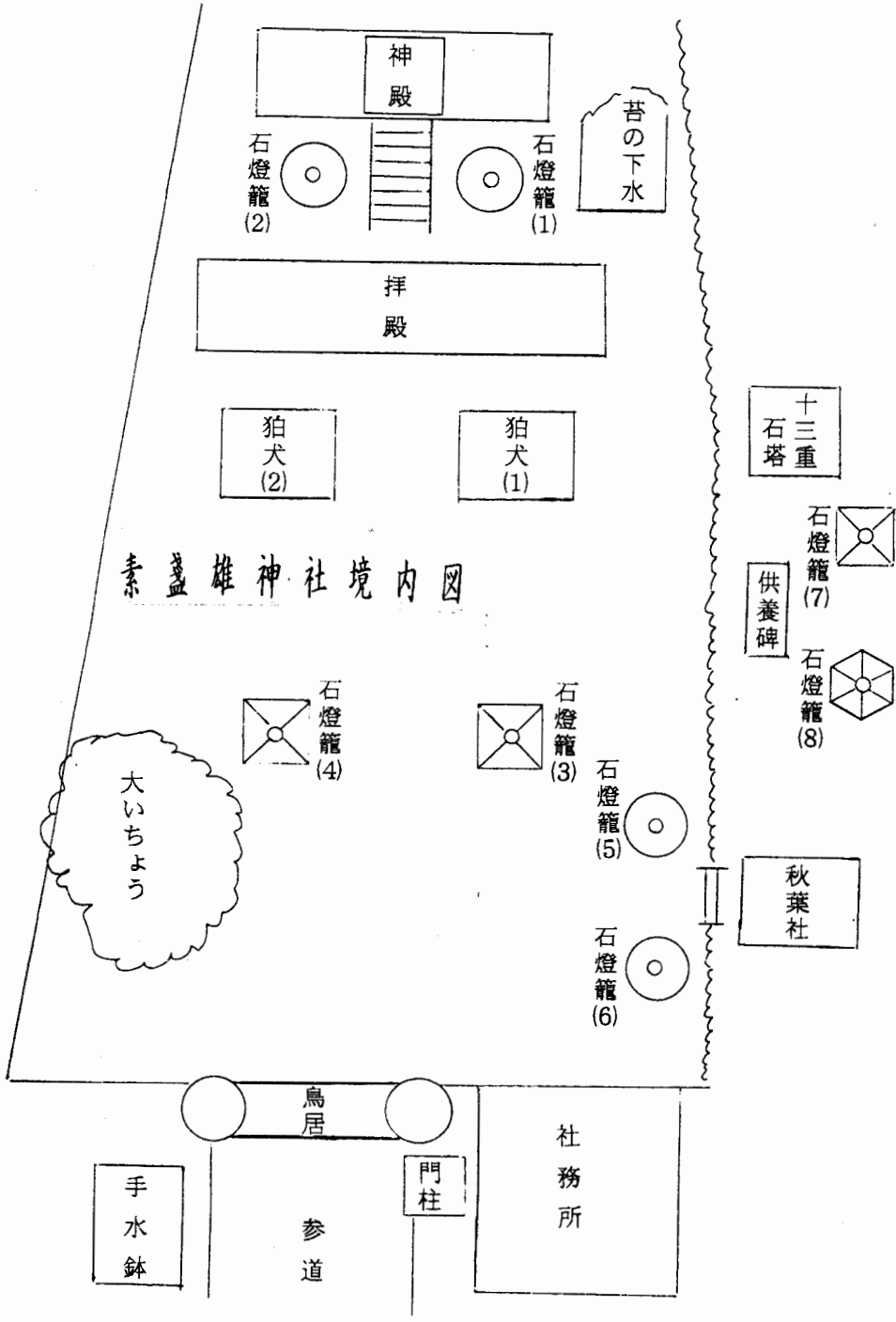


素盞雄神社

奈良県桜井市初瀬



茅の輪くぐり



## 素盞雄神社

素盞雄神社は西国三十三所霊場第八番の札所、長谷寺の仁王門の前に立って本堂に向かつて右方の山麓にイチヨウの大木が見える。その下にこの素盞雄神社が鎮座されている。神社へは仁王門からその方向へ坂を下るか、長谷寺門前の広場（桜の馬場）から初瀬川沿いに少し上ると古河辺（初瀬川）に架けられた連歌橋を渡り、正面の石段を登った左側に「素盞雄神社」と刻まれた門柱と鳥居が見える。

御祭神 素盞雄尊

大倉姫命（下照姫 鸕姫 大国主命息女）明治四十一年九月三日合祀

創祀 天曆二年戊申年（九九一年）

御神徳 家内安全 商売繁盛 厄除け

例祭 七月十三日

この神社は長谷寺の守護神の一つとして祀られたのであろうが、長谷寺密奏記にはそれらしい記述はない。

素盞雄神社の社名は、明治初期の神仏分離令により「素盞雄尊と牛頭天王とは一体である」ということで、仏教色のある「牛頭天王社」が廃止され「素盞雄神社」と改名された。こういう例は日本各地に多くあるようである。長谷寺に保存されている寛永十五年（一六三八年）に描かれた境内図では「牛頭天王」となっている。

古代日本の都では度々集団的な疫病が発生した。これは何か子細あって非業の死を遂げた人々の怨霊のなす業と言われたために、その人達の霊を慰め鎮めて、怨霊の業から逃れようとして営まれたのが『御霊会』である。

この御霊会は、貞観五年（八六二年）五月二十日、京都神泉苑で初めて斎行された。

その後、清和天皇が京都八坂祇園に貞観十八年（八七六年）、牛頭天王を勧請し祀ったのが祇園感神院である。しかし、この感神院は奈良興福寺の管轄であった。

その当時、長谷寺は東大寺の所屬であったが、正暦元年（九九〇年）に所屬が東大寺から興福寺に移った。そしてその翌年、正暦二年戊申（九九一年）に牛頭天王の御分霊を祇園感神院より初瀬の地へ勧請を願い、現、素盞雄神社の地に御祀りしたのが、この神社の創始である。

長谷寺は昔から霊験が深く多くの参詣者が続いた。中でも藤原氏からの崇敬は篤く、藤原家隆はこの神社の近くに静居しており、次の歌を残している。

紅の薄花桜ほのぼのと 朝日いざよう 小泊瀬の山

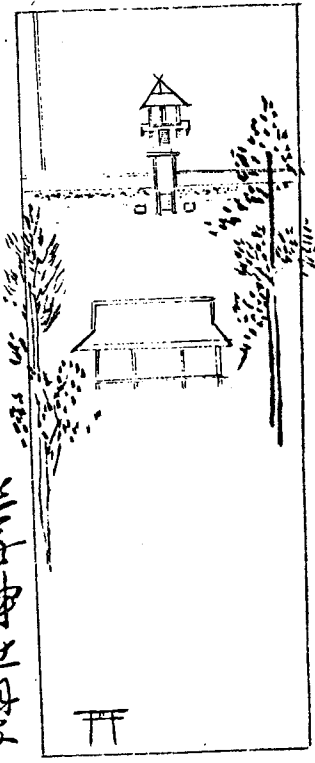
また境内には藤原家隆卿の供養のために立てられた十三重の石塔（鎌倉時代作）がある。

本居宣長が長谷寺に参詣したときの様子を『菅笠日記』で次のように述べている。

「このやゝおくまりたるところに、家隆の二位の塔とて、石の十三重なるあり。こはやゝふるく見ゆ。そこに大きな杉の、二またなるもたてり。また牛頭天王の社、そのかたはらに、昔の下水といふもあり。ここまではみな、山のかたそはにて、川にちかき所也」

素盞雄神社の明治以前の様子は不明であるが、「茅の輪くくり」の行事が受け継がれてきていること、神社の御札に「牛頭天王」の文字と、下方に素盞雄神社の朱印が捺されている。このようなことから神社の歴史がしのばれる。

明治七年九月  
大和國大上郡初瀬村  
素盞雄神社圖



素盞雄神社  
初瀬村  
大和國大上郡

素盞雄尊

素盞雄尊・建速須佐之男命

建速は激しく荒ぶる強さを表し、須佐は勇猛と清浄を表す意味であるから、素盞雄尊は力強く、祓い、清めて下さる神様である。

素盞雄尊は天照大神の弟で、高天原で罪汚れを犯し、そのため地上に追放された。そのため地上の罪汚れを一身に背負った贖罪の神としてみられることになった。

天降った素盞雄尊は、天の神達の荒魂の化身として出雲国の簸川の川上で八岐の大蛇を退治し、その尾から天叢雲剣を得てそれを天照大神に献上した。このことにより素盞雄尊は地上の邪気・邪悪を祓い清め、人間の苦しみを除き、生活を守護する神となられた。

中世に大国主命が大黒天に、事代主命が恵比須神に習合したように、素盞雄尊と牛頭天王が重ねられ、一身同体の神とされ、新しい信仰が生まれてきた。

牛頭天王 (祇園天神)

牛頭天王は薬師如来の垂迹神で、素盞雄尊の本地仏である。

牛頭天王はインドでは、武塔天神 (武塔天王) とも呼ばれる。

牛頭とは忿怒鬼神の類の称であって、インド伝来の神であるというが、確証はない。

牛頭天王・素盞雄尊は同一神とされ、この信仰から疫病退散、邪気祓いに靈験がある。  
牛頭天王信仰は一般に祇園信仰の名によって広がっていった。

初瀬川上に鎮座する『素盞鳴神社』を「こつてらはん」と里人は呼んでいるが、その由来を推測してみた。

ゴズテンノウシヤサン↓ゴズテンノウシヤハン↓ゴズテンノウハン↓ゴズテンハン↓  
↓ゴツテラハン と変化したと考えられる。



お札

### 茅の輪くぐり

社頭に茅で造った大きな輪を立て、ここを潜って神社へ参拝することによって、疫病や災いを防ぎ取り除く願いを込めて祈る行事で『名越(夏越)の祓』と呼ばれている。

この「茅輪くぐり」について、『風土記逸文』の備後国 蘇民将来の項に由来が記されている。昔、北の海においてになった武塔神(素盞雄尊)が南の海の女子を与波比(求婚)に出ていかれたが日が暮れた。そこに将来兄弟が住んでいた。兄の蘇民将来は貧しく、弟の巨旦将来は裕福であった。そこで武塔神は弟の巨旦に宿を頼んだが拒否された。しかし兄の蘇民は快く承諾し、粟柄(粟の茎)で御座所を造り、粟飯などでもてなした。一夜明けて武塔神は帰っていかれた。

数年たって武塔神は八人の子供を連れて蘇民将来の家を訪ねて「私は貴方にお礼がしたい。貴方の家族はこの家に在宅しているか」と尋ねられた。蘇民将来は答えて「私の娘と妻がおります」「そこで武塔神は「茅の輪を腰の上に着かせよ」と仰せられた。蘇民は仰せの通り家族の腰に茅の輪を着けさせた。その夜、蘇民の家族をのこして他の者たちは急死してしまった。そこで武塔神が仰せられるには「私は速須佐雄神である。後の世に疫病がはやったら、蘇民将来の子孫だといって茅の輪を腰に着けると災難を免れるであろう」と仰せられた。

この話からこの「茅の輪くぐり」の行事が生まれたという。

大倉姫命

(下照姫命・滿姫命)

大倉姫命は大国主命の息女で、古事記の「大国主命の国譲り」の段の前で、天照大神が高天原から地上の葦原中国の大国主命へ国譲り話の使者として差し向けられた天若日子との話が述べられている。

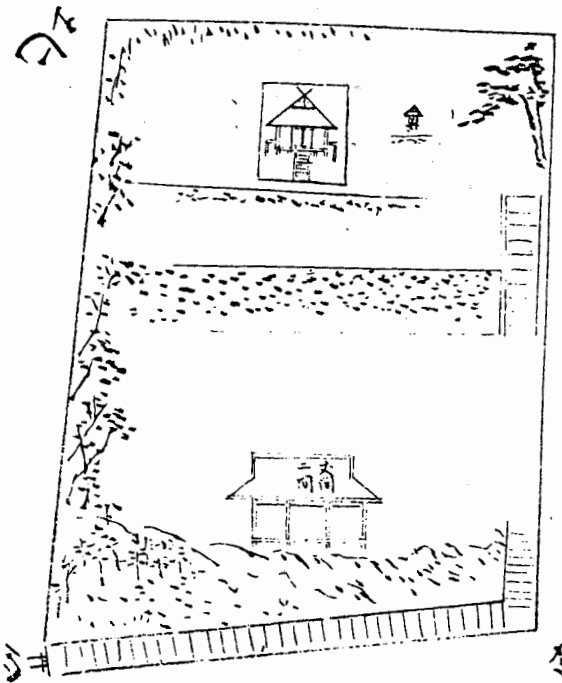
鍋倉神社 (式内社)

鍋(埜)神社は延喜式に登載された古い神社であるのに、今は、その社殿はない。『長谷寺密奏記』には「東山ノ頂ニ坐シ御ス」と記されているが、時代と共に下方に遷座せられ、興喜天満神社横に、そして興喜山麓「なべくら垣内」に鎮座された。しかし明治初期の神仏分離令の影響で、明治四十一年九月三日この神社は廃社され、御祭神の大倉姫命は、素盞雄尊と相殿で祀られることになった。その時、境内社の秋葉神社は共に素盞雄神社の境内社として遷座し祀られた。里人の話しによると、現在の秋葉神社の社殿は、鍋倉神社の社殿が使用されている。

明治七年九月

大和國式上郡秋瀬村  
鍋倉神社圖

此等神社  
田守源次  
多井豊三



鶯墳 (鶯山)

鶯墳は素盞雄神社境内の少し南の元鍋倉神社の鎮座地(ナベクラ垣内)の後方(山側)にあったという。そこには『うぐいす墳』と刻まれた約二メートルの石碑が立てられていたが、明治十五年にふとした思い違いのために一夜の間に墳丘は崩され、鶯墳は謎の中に消えてしまった。この墳は、鍋倉神社(御祭神、大倉姫命〔別名〕下照姫・鶯姫)の祭祀された場所が、与喜山頂から與喜天満神社横へ、そして与喜山山麓のなべくら垣内と、山を下りつゝ遷座されてきたことから、鶯墳に葬られたのは、大倉姫命(鶯姫)ではなかったのだろうか。

いくつかの古書には、次のように紹介されている。

和州旧跡幽考 藻塩草、大和国云々。 澄月歌枕に初瀬云々

懷中抄 我宿の花そのまた音せぬは鶯の山を出ぬなりけり

夫 木 くもの井は谷の心も夕とてかえるやよいの鶯の山

大和名所和歌集 二本の杉のほとり也

夫 木 雲のゐる谷の心も夕とて帰るやよいのうぐいすの山

大和名所図会 「藻塩草」に曰く、大和国 「澄月歌枕」に初瀬云々

西国三十三所名所図会 所在未詳。澄月『歌枕』に初瀬云々。『藻塩草』に大和国とあり。

境内 (石燈籠下の数字は三頁の境内図の石燈籠の番号です)

門柱 正面銘 素盞雄神社 花崗岩

銘 奉納 平成三年十二月吉日 森井石材店

総高 二九〇cm 門柱高二四〇cm 巾四〇cm 厚一九cm

鳥居 花崗岩

銘 氏子中 平成三年十二月吉日

総高 三四〇cm 基部間隔 二五〇cm

神 殿 南向 春日造 椴皮葺 朱塗り

桁行 四尺(約一・二二m)

梁行 三尺(約九〇cm)

拝 殿 切妻造 千鳥破風付 瓦葺

桁行 三間(約五・四五m)

梁行 一間半(約二・七二m)

秋葉社 御祭神 大山祇神

由 緒 不詳(明治四十一年九月三日 現在地に遷座された。)

御神徳 防火・防災

神 殿 西向 春日造 柿板葺 元鍋倉神社神殿を転用している。

桁行 四尺(約一・二二m) 梁行 三尺八寸(約一m)



狛犬 一對 狛犬(1)(2)

大きさ 狛犬 高さ 約1m 幅 約四十cm

台座 高さ 約一二二cm 最大幅一八〇cm 最大奥行一四五cm

正面 献衆安全 (1)(2)共同じ

狛犬(1) 神殿側面 発起方 的場□□□／喜多勘六／中西勘兵衛／

世話人 河内屋□□／□□□□□／三谷屋□□／□□□□□

鍵屋与右衛門／椿屋新次郎／白河屋庄吉／江戸屋伊三郎

狛犬(2) 西側側面 文久／紀元／辛酉／九月 (文久元年：一八六一年)

石燈籠(1) 丸形灯籠

銘 牛頭天王寄進 正徳三年癸巳十一月吉日 河上庄七／小七郎／庄屋歳三／石屋宗八郎

総高二〇八cm 宝珠高二七cm 笠高二六cm 火袋高二一cm 中台厚二六cm 竿高五四cm

基壇高二一cm 最下基壇巾九〇cm (正徳三年：一七一三年)

石燈籠(2) (1)と同型

銘 牛頭天王寄進 文政八年十一月吉祥日 的場□□□ (文政八年：一八二五年)

石燈籠(3) 角型灯籠

銘 献燈 松崎房吉 昭和五年三月 総高 cm 宝珠高 cm 笠高 cm 火袋高三五cm 中台厚二〇cm 竿高三六cm

基壇高九二cm 最下基壇巾一一〇cm

石燈籠(4) (3)と同型

銘 献燈 昭和五年三月立 世話人 井上百蔵／奥田英雄／中山巳之造／小島忠三郎

石燈籠(5) 丸型灯籠 火袋は四角

銘 常夜燈町内安全 □□□□□□吉日 施主 的場□□□

総高一八五cm 宝珠高二〇cm 笠高一九cm 火袋高二四cm 中台厚 一一cm

基壇高五〇cm 最下基壇巾七〇cm

石燈籠(6) (5)と同型 (文政四年：一八二二年)

銘 文政四年八月吉日建 常夜燈町内安全 施主的場 (石燈籠の前後が入れ替わっている)

石燈籠(7) 角型灯籠

銘 常夜燈 総高一八二cm 宝珠高二五cm 笠高一五cm 火袋高二三cm 中台高一四cm

基壇高一五cm 基壇巾四〇cm

石燈籠(8) 六角型灯籠 春日型灯籠

銘 献燈 天□□□□□巳二月吉日 施主□□□□□

総高一五三cm 宝珠高二四cm 笠高一三cm 火袋高二六cm 中台厚一五cm

基壇高一五cm 最下基壇巾四六cm

石燈籠残欠 笠 竿 銘宝延三庚午九月吉日 (宝延三年：一七五〇年)

供養碑 弘奉供養處用待 天和三年五月十九日 深吉／長三郎／藤五郎／

新二郎／長二郎／十三屋弥兵衛

高 七四cm 巾五二cm 厚二〇cm (天和三年：一六八三年)

十三重石塔 鎌倉時代作 基壇に金剛界四方仏の種字が刻まれている。

金剛界四方仏 北<sub>ノ</sub>不空成就如来・東<sub>ノ</sub>阿門如来・南<sub>ノ</sub>宝生如来・西<sub>ノ</sub>阿弥陀如来

最下層 基壇四五・五cm四方 高四六cm 笠巾七五・五cm 笠厚二六cm

この石塔は、藤原家隆卿の供養塔として建てられたと伝えられている。

手水鉢

鳥居手前横にあり、与喜山の湧水を導水し、何時も溢れている美味しい水である。

巾一〇〇cm 奥行八五cm 高四〇cm 水溜巾七〇cm 奥行六〇cm 深二五cm

苔の下三寿 神殿の山側から湧水している。

石碑 高一〇四cm 巾四二cm 厚三〇cm

現在の湧水は減少しているが、昔は、長谷寺に修行に來た僧侶各人が、その日に必要な水を

毎朝この「苔の下三寿」まで汲みに來ていたと言う。

大銀杏 奈良県指定 天然記念物 昭和四十九年三月二十六日指定

案内板

イチヨウは落葉性の高木で葉は長枝では互生し、短枝ではむらがつている。形は扇形で秋の落葉まえには美しい黄色となる。種子は核果的で、熟すると黄色くなり異臭を放つ。これをギンナン（銀杏）という。雌雄異株である。

初瀬のイチヨウは雄株で樹高約四〇m、枝張り南北二三m、東西二・m、目通り周

囲七・一五mであり、イチヨウの巨樹としては県下最大のものである。

平成二年三月

奈良県教育委員会



御神紋  
変わり祇園守

素盞雄神社

発行日 平成十一年八月十五日

編集・発行 土井 正

奈良県桜井市 初瀬 四三五〇  
電話〇七四四 四七七 七七七

